

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 14 日現在

機関番号：32414

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K02490

研究課題名（和文）愛着スペクトラム評価システムの開発とその有用性の検討

研究課題名（英文）Development of Attachment Spectrum Assessment System and its usefulness

研究代表者

青木 豊（AOKI, Yutaka）

目白大学・人間学部・教授

研究者番号：30231773

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、被虐待・ネグレクト乳幼児の愛着の問題を、安定した愛着から愛着障害に至るスペクトラムとして捉え、対象児の愛着の問題を評価できるシステム・評価法を作成することである。研究の第1相で同評価法を作成した。同評価法は、愛着関連障害をスクリーニングする養育者への面接と、養育者との愛着の安定度を測る質問紙から構成された。第2相で、児童相談所により虐待・ネグレクトと判断された48例の乳幼児と、一般の乳幼児（コミュニティサンプル）とに対して、同評価法を施行した。結果、同評価法により、被虐待・ネグレクト群の方が、一般の乳幼児よりも、愛着関連障害の疑い例数とその程度が有意に高いことが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

開発された評価法は、一定の妥当性が得られた。またこの評価法は、より安定したアタッチメントから障害にいたるスペクトラムのどこに、対象児のアタッチメントがあるかを評価できるため、以下の広い領域で研究や支援現場で利用できる。第1に、乳幼児虐待・ネグレクトの福祉、臨床の実践において、支援、治療方針を導くため、同領域の研究にも、利用可能である。第2に、地域の子育て支援の領域でも、支援のため、研究のためにも利用可能であり、第3に保育所などの実践あるいは研究にも用いることができる。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to develop an assessment system that evaluate attachment disturbances of abused / neglected young children which are somewhere on the attachment spectrum from secure attachment to disorders. In Phase 1 we developed the system that consisted both of interviews with caregivers screening for attachment-related disorders and a questionnaire measuring the level of attachment security with caregivers. In Phase 2, the system was applied to 48 infants who were judged to be abused or neglected by the child protection services and 54 community samples. As a result, the system showed that the number and degree of suspected attachment-related disorders were significantly higher in the abuse / neglect group than in community samples.

研究分野：乳幼児精神保健

キーワード：アタッチメント アタッチメント関連障害 評価法 被虐待・ネグレクト乳幼児

1. 研究開始当初の背景

本邦において乳幼児期の虐待・ネグレクトは児童虐待の中でも例年 45%程度を占めており、さらに死亡例の 80%近くが 3 歳以下である。加えて、より早期の被虐待・ネグレクト体験はより後期のものよりも、後の脳の発達、社会-情緒的発達により深刻な影響をあたえるとの知見も積み重なっている。乳幼児虐待・ネグレクトの特異性と重要性が強調されるゆえんである。これら乳幼児の支援のために、虐待・ネグレクトが乳幼児にどのような精神病理を与えるかを評価することは、児童の福祉の本質的問題であり、必須である。被虐待・ネグレクト乳幼児の特異的問題は、アタッチメントとトラウマの問題であると考えられている。とくにアタッチメントの問題は、非安定型のアタッチメントから DSM-5 に示されているアタッチメント関連障害まで広い範囲があり、それら进行评估することは、処遇、支援の方向性を決める重要な指針となる。しかし本邦においてアタッチメントの問題は、不安定型アタッチメントを含め、すべてアタッチメント障害と認知されたりするなど、概念上の混乱も多い。そのためアタッチメントの安定度や関連障害の有無のルールアウトなどが困難な状況にある。さらに、欧米においては、研究理論上より純粋・単純なデザインが求められるため、特定乳幼児のアタッチメント関連障がいの有無のみを測定する測りや、アタッチメントの型を分類するストレージ・シチュエーション法などは開発され、膨大な研究が行われている。しかし、より健康なアタッチメントからアタッチメント関連障害までのスペクトラムの中で、特定の乳幼児がどの位置にいるかを測るシステムの開発はほとんど見られない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第 1 に被虐待・ネグレクト乳幼児のアタッチメントの問題を、安定したアタッチメントからアタッチメント障害に至るスペクトラムとして捉え、対象児のアタッチメントの問題を評価できるシステム・評価法すなわちアタッチメントスペクトラム評価システム Attachment Spectrum Assessment System: ASAS を開発することである。第 2 に、その有用性を示すことである。第 3 には、アタッチメント関連障害—DSM-5 にある 2 つの障害すなわち反応性アタッチメント障害、脱抑制型対人交流障害の疑い例と Zeanah らが定義した安全基地の歪み障害の疑い例が、被虐待・ネグレクト群にどの程度発生しているかを調査することである。ASAS がアタッチメントスペクトラム上の子どもの位置を特定できるので、ASAS の有用性が示せば、第 1 に多くの現場で乳幼児のアタッチメントを評価することができる。保育所、育児相談場面、乳幼児健診場面、虐待支援、精神科診療、などの現場である。またこれら現場をフィールドとしたアタッチメント研究の測定法の 1 つに、ASAS は加えることができるであろう。

3. 研究の方法

本研究は、2 段階に分けて行われた。第 1 段階では、文献のまとめとこの領域の専門家の議論により、ASAS ver.1 を作成した。その後、A 県の児童相談所の虐待・ネグレクトに専門的関わっている職員に対して、同評価法の半日研修を行った。研修の内容は、被虐待・ネグレクト乳幼児の精神病理の講義、ASAS の解説、ASAS の実習である。そして同職員が、児童相談所により虐待・ネグレクトと判断された乳幼児（被虐待・ネグレクト群：以下被虐待群）20 例に、研究者が一般の乳幼児（コミュニティサンプル）24 例に、同評価法を施行した。実施方法は、被虐待群では、対象児を最もよく知る保護所職員（すべての子どもが一時保護されていた）に、児童相談所の職員がインタビューと質問紙の配布・回収を行った。コミュニティ群の子どもは研究者らがスノーボールサンプリングで抽出し、対象児の母親にインタビューと質問紙の配布・回収を行った。結果を分析し、さらに施行者へのアンケートと施行者との議論を行った。これらにより、第 1 段階の有用性を確認し、ASAS ver.2 を開発した。第 2 段階では、ASAS ver.2 について、再度同評価を被虐待群に施行する児相職員（ver.1 時と職員の一部変化があった）に対して、第 1 段階とほぼ同様の内容をもった半日研修を行った。その後、第 1 段階と同じ方法で、児相職員が、被虐待・ネグレクト児 28 例、研究者がコミュニティ群 30 例に同評価を行った。また児相職員に、ASAS ver.2 についてのアンケートを行った。

4. 研究成果

1) 結果

第 1 段階において、ASAS ver.1 が開発された。同評価法は、Zeanah らによって開発されたアタッチメント関連障害をスクリーニングする養育者への面接（Disturbance of Attachment Interview: DAI）の改変版と、研究責任者らによって開発された養育者とのアタッチメントの安定度を測る質問紙（アタッチメント行動チェックリスト ABCL）から構成された。この構成により、対象児のアタッチメントは、その安定度とアタッチメント関連障害疑いの有無の 2 つを測定することができる。またこの検査により、対象児は、安定型のアタッチメントから最も非適応的

なアタッチメント関連障害までのスペクトラムの中に位置づけることができるはずである。

第1段階での調査結果を以下記載する。

被虐待・ネグレクト群（以下被虐待群）の子どもは20名で、すべてが一時保護されていた。年齢は1～6歳である。コミュニティ群の子どもは研究者らがスノーボールサンプリングで抽出した首都圏の1～6歳の24名である。被虐待群とコミュニティ群を比較すると、3つのアタッチメント関連障害、すなわち反応性アタッチメント障害、脱抑制型対人交流障害、安全基地の歪み障害 SBD 疑い例は、被虐待群でそれぞれ2人（10%）、5人（25%）、3人（17.6%）で、コミュニティ群で0人、0人、1人（4.2%）であった。アタッチメント関連障害得点（同障害の程度を表す）の得点比較では、Man Whitney のU検定によって上記3障害のすべてで、被虐待群の方がコミュニティ群より有意に高かった。

第2段階での結果を以下記載する。

ASAS ver.1 と ver.2 が文言のより分かりやすい修正のみであったため、第1段階と第2段階の対象を合計して分析を行った。第2段階で被虐待群は28例、コミュニティ群は30例であったため、被虐待群の合計が48人、コミュニティ群の合計は54人であった。まず、アタッチメント関連3障害疑いの人数は、被虐待群でそれぞれ、0人（0%）、5人（10.4%）、7人（14.6%）、コミュニティ群で0人（0%）、0人（0%）、1人（4.2%）であった。またアタッチメント関連障害得点（同障害の程度を表す）の得点比較では、Man Whitney のU検定によって上記3障害のすべてで、被虐待群の方がコミュニティ群より有意に高かった。

児童相談所の職員へのアンケートは、28人の有効回答を得た。ASASの施行時間について、85.7%の回答者は、ある程度適切な時間で終了できたと回答した。また8割強が、ASASにより対象児のアタッチメントの問題の理解が促進したと回答した。

2) 考察

① ASAS の有用性

ASAS の有用性に貢献する結果が得られた。第1に、ASAS は、ABCL と DAI によって構成されるが、アタッチメントの安定性を測定した ABCL は、すでに妥当性のエビデンスが示されており、アタッチメント関連障害についてのインタビュー（DAI）は少なくとも欧米において妥当性のエビデンスがある。これらから ASAS の内的妥当性は裏打ちされている。第2に、評価としての使いやすさ、使った実感についてアンケートを行った。ASAS 施行時間は適切で、アタッチメントの問題がより理解できたと答えた人が80%を超えていた。第2にさらに分析結果も、ASAS の妥当性に貢献する所見であった。すなわち、被虐待群にアタッチメント関連障害の最重症である反応性アタッチメント障害、脱抑制型対人交流障害を合わせると5人（10.4%）であったが、コミュニティ群はともに0人であった。より軽症とは考えられるが障害には当たる安全基地の歪み障害 SBD 疑いは、被虐待群で14.6%であり、コミュニティ群でも1人おり4.2%であった。アタッチメント関連障害傾向も被虐待群はコミュニティ群より優位に高かった。これら結果は、ASAS の妥当性に貢献するものである。

② 被虐待群におけるアタッチメント関連障害疑いの人数と発生率

被虐待群において、DSM-5 の反応性アタッチメント障害と脱抑制型対人交流障害を合わせて10.4%であった。この発生率はルーマニアの劣悪な施設における発生率約30%の約3分の1である。これら2つの障害は、重度の社会的ネグレクトが要因と考えられている。ルーマニアの劣悪な施設研究（BEIP studies）では、ほとんどの乳幼児が重度のネグレクトを受けていた。本研究の被虐待群は、社会的ネグレクトのみを抽出したサンプルではない。したがってその発症頻度が低いことは妥当である。また SBD については、現在欧米でも同障害についての研究が遅滞し、その概念自体が DSM-5 の関係性障害の中に吸収されている感がある。そのため本研究結果の SBD 疑い発生率が妥当であるかの判断は困難である。しかし、虐待・ネグレクト群から SBD が見いだされ研究に至っているため、SBD はアタッチメントスペクトラムにおいて DSM-5 のアタッチメント関連障害の次に病理が重症である仮説されている。本研究で SBD は虐待群で14.6%と DSM-5 のアタッチメント関連障害よりは発症率が高く、コミュニティ群にも1例（4.2%）見いだされたことは、妥当な結果と考えられる。

さて、我々は、上記の結果を、日本子ども虐待防止学会第27回学術大会、第117回日本精神神経学会学術総会シンポジウムで ASAS について発表した。これら発表では、ASAS は CAT-P の一部として施行された。CAT-P とは被虐待・ネグレクト乳幼児の精神病理に対する包括的3軸評価法 Comprehensive Assessment of Tri-Psychopathologies for maltreated infants and toddlers: CAT-P のことである。3軸とはアタッチメント（ASAS）、トラウマ、発達症の3つである。これら、発表ではアタッチメントの問題とトラウマの問題（PTSDを含む）、また発達症の発症率などを発表した。これら発表を通じて、今後 ASAS を含めて CAT-P の改善、より具体的には面接や質問紙の文言の修正、コーディングシステムの再考、教育システムの改善が課題となった。ASAS を含め、同評価法の概略、有用性と妥当性の検討について、現在論文化を始めている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 堂山亜希、青木豊、三樹優子、福榮太郎、佐藤篤司、宮戸美樹	4. 巻 55
2. 論文標題 被虐待乳幼児の発達障害傾向について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 明治安田こころの健康財団研究助成論文集	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宮戸美樹、福榮太郎、青木豊	4. 巻 38
2. 論文標題 アタッチメント行動チェックリスト（親用）の信頼性・妥当性の検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 心理臨床学研究	6. 最初と最後の頁 39-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木豊	4. 巻 28
2. 論文標題 心理的問題を抱える子どもにおける「親子のつながりの困難さのケア」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 乳幼児医学・心理学研究	6. 最初と最後の頁 113-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木豊	4. 巻 121
2. 論文標題 愛着とパーソナリティ障害 愛着理論はパーソナリティの適応化にどのように貢献できるか？	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 精神神経学雑誌	6. 最初と最後の頁 728-735
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木豊	4. 巻 22
2. 論文標題 乳幼児期の重要性と支援	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 チャイルドヘルス	6. 最初と最後の頁 103-106.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木豊	4. 巻 30
2. 論文標題 乳幼児と愛着	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 そだちの科学	6. 最初と最後の頁 20 - 24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 青木豊
2. 発表標題 被虐待・ネグレクト乳幼児の心の状態と将来 - 保育所での支援を考えるための知見
3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会第26回学術大会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 青木豊
2. 発表標題 乳幼児のアタッチメントとトラウマの評価と親子への支援
3. 学会等名 第117回日本精神神経学会学術総会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 青木 豊、福榮太郎、井上美鈴、平部 正樹、堂山 亞希、折谷妙子、佐藤和宏、鈴木浩之
2. 発表標題 被虐待・ネグレクト乳幼児の精神病理に対する3軸評価法CAT-Pの開発：第2報 開発過程と有用性の検討
3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会第26回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 青木 豊、福榮太郎、三樹優子、平部 正樹、堂山 亞希、奥山 眞規子
2. 発表標題 被虐待乳幼児の精神病理に対する3軸評価法CAT-Pの開発：第1報 開発目的、内容、準備的有用性-
3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会第26回学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 青木豊
2. 発表標題 特別講演：虐待が乳幼児のこころに与える影響
3. 学会等名 第70回総合病院精神医学研究会GHP（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 青木豊
2. 発表標題 教育講演：乳幼児のアタッチメントと精神医療
3. 学会等名 日本精神衛生学会第34回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 青木豊
2. 発表標題 ビデオを用いた教育セッション『観察眼を養う～乳幼児編』 乳幼児の母子セッション
3. 学会等名 第21回児童精神分析臨床研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 青木豊
2. 発表標題 愛着とパーソナリティ
3. 学会等名 第114回日本精神神経学会学術総会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 青木豊 神庭重信 松下正明 三村将	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中山書店	5. 総ページ数 448
3. 書名 講座精神疾患の臨床 3 不安または恐怖関連症群 強迫症 ストレス関連症群 パーソナリティ症(三村編)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	福榮 太郎 (FUKUE Taro) (10638034)	横浜国立大学・ダイバーシティ戦略推進本部・准教授 (12701)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	宮戸 美樹 (MIYATO Miki) (60456332)	横浜国立大学・教育学部・教授 (12701)	
研究分担者	中村 和昭 (NAKAMURA Kazuaki) (80392356)	国立研究開発法人国立成育医療研究センター・薬剤治療研究部・室長 (82612)	
研究分担者	藤原 武男 (FUJIWARA Takeo) (80510213)	東京医科歯科大学・大学院医歯学総合研究科・教授 (12602)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関